遞信省認可

いらつめ

毎月四回發行

いらつめ第四十一號目次（明治廿三年二月八日）

●挿畫…鳩の大圖（石版色刷）……狩野貞信
●小說…心づくし第五回…………毛布野女史
●家政…シャツ裁縫法‖大黒頭巾裁縫法‖宗十郎頭巾裁縫法‖船底頭巾裁縫法‖早道頭巾裁縫法‖吉原頭巾裁縫法…木下貞子
●文藝美術…韻語の品格…………美妙齋主人
○懸賞文章美人雪夜…嫩等女史、蘆野鉄肓、しづと
○盜坪の死（韻文）…………槐月陰史
○君よりほかは（韻文）………美妙子
○ひさつびさつ（同）…………ぷろくたア
●雜纂…日本陶器小史‖舊幕時代の監獄…美妙齋主人

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵稅共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六十五錢郵稅共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵稅●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手數きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手て一割り增しなれは妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す假さ一て雜誌の表紙に成美社の捺印と加へましたから是を目標さして御求めと願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任ませんから捺印の無いのと御求に爲っても代金支拂に及びません

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年二月七日印刷
明治二十三年二月八日出版

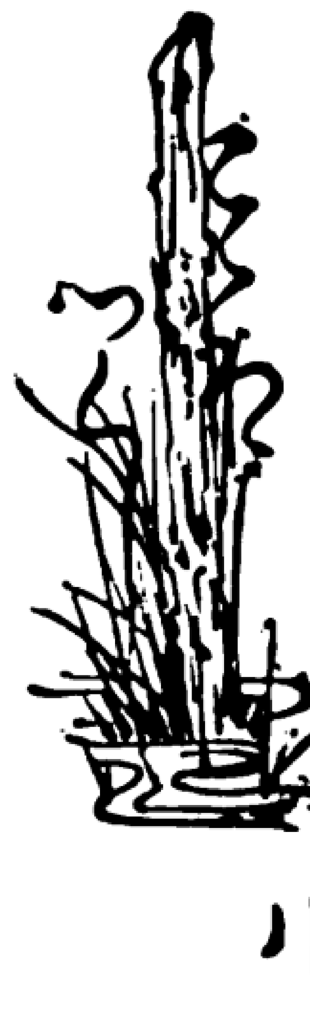
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には色石版鳩の大圖●頭巾裁縫法美妙子の韻語の品格懸賞文章美人雪夜てにずん詩老の韻文（槐月陰史譯）日本陶器小史●舊幕時代の監獄などが出て居ます

第四十一號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第四十一號



小説

第五回

毛布野女史

森尾彌七の拘留後幾もなく宅間信種も亦連累の嫌疑に依りて終に引致となりしかば初めハ這回の被告事件も其風説は區々にして半信半疑の間に在りしも斯く連累の出る上からは萬更痕跡なきことにもあらざるへしと言ひ傳へり。殊に被告の不幸といふは近間世間の物騒も漸く少し薄らきたるゆゑ彌嫌疑の根を固うして言ひ解くべくもあらずなりたり。之れが爲め現在今田屋の者までも若しや事實でありハせぬかと思ふものさへある程なれど玆に同家の白鼠と人に知られし主坐伴頭の淸吉のみハ只一人り他人は何んと云はうとも主人に限り然ることは決してあらう筈はなし。想ふに多分は人違ひか或ハ事の行違にて一時嫌疑を受けたるのみ。敢て心配するに及ばず。軈て放免せらるゝならん。今日ハ歸るか明日戻るかと首を延ばして待てども〳〵歸らぬのみか。噂を聞けば豫審の調も終結して不日公判を開くとのこと。素破一大事此の儘にハ爭て見過すことを得べきと心ばかりハ逸れども商法上のことゝハ違ひ裁判沙汰ハ己か力に復た如何ともすることを得ざれは個は其道にかしこき人に依賴するより外はあらず。誰は宜からん彼れハ如何と心當りを詮索するに其頃名高き代言人にて浦見不二雄と呼び做せるはパリストルもな此人なぞ適當ならめと思ふにより委細を語りて依賴せしに浦見も豫て此の事件ハ噂に聞ける疑獄なれば首傾けて暫くは沈吟しつゝ左右なくハ承引べくも見えざりしが漸くにして打頷き如何にも依賴に應ずべし就ては明日監獄に赴き面會せし上兎も角も宜きに謀らひ申さんと最と賴母しき返答に淸吉少しく安堵をなし暇を告げて歸りけり。

斯くて浦見ハ翌日に至り監獄署に行き彌七に逢ふて昨日伴頭淸吉より依賴を受けし旨を述べ偖其事件の顚末をと問ふに彌七ハ何思ひけん天を仰て嘆息なし默然として居たりしが軈がて浦見に打向ひ

「扨御深切なる思召又淸吉の心遣ひも決して疎にハ思ひませんが實は今度の事件に就きてハ拙者に深き所存もあり冤の罪にはありますれど甘んじて刑を受けまする覺悟で

「ソレヤ何ういふ御考へかは知らんが全体人間の權利といふものは」

「サ其の權利の貴重なることも聊か心得ては居りまするなれども

「然らば何故冤の罪を」

「今も申しました如く深き所存の御座りまするもな強ひて辨解はせん積り。必らず共に御心配下さいまするには及びません」。

「御當人が其氣ならば拙者ハ何も彼是申すにも及ばんが倘

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

は能く熟考し給ふべし

ト詞を殘して手持不沙汰に歸り來けるが心の内に彼奴の人体言葉遣ひ決して尋常の商人ならず。然るに冤の罪なからも刑を受けんとする覺悟は舊惡ありて露顯を怖れ其れ故伏罪するにあらずや。否々伏罪すればとて舊惡發露せぬにも限らず。何にか仔細のあることならんと獨り考へ居たる處へ今日の樣子を聞かんとして幸ひ清吉が尋ね來しゆゑ實は斯々云々と彌七に面會せし始末を委しく語り聞かすれども清吉笑つて信用せず

「先生御串戯を仰しやらずに何うぞ眞正のことを仰聞せなすつて」

「イヤ決して串戯ぢやないが拙者も實は不審に思ひます。

「イヤナニ別に上氣た樣ではないが思ふに是には仔細のあることゝならん。貴殿には心當りはありませんかな」

「何うも一向合點がまゐりません。シテ先生何うにか宜い御工夫はありますまいか」

「ないにも限らんが、と云つて差當り何うといふ考もないけれども斯うして見ては何うか知らん」

と耳に口寄せ呶き示すを悉皆まで聞かず

「成る程左樣然らば是より直く參りませう」

「イヤコレ／＼容子を人に悟られると却て事件の妨になるから其處は能く注意せんでは往きませんぜ」

「畏まりました」

と忠義一途の淸吉は暇乞さへソコ／＼に飛ぶが如くに宅間の宅に赴きたりしが折惡しく來客ありとのことなれば暫し客間に控え居ける。廣くもあらぬ家のことゆゑ奥にて話を事柄は手に取る如く聞ゆるを人の談話を洩れ聞くは快よからぬことながら若しも主人を救ふべき手がゝりとなることもやあらんと耳を淸して控えけり。

斯く人ありて聞き居るとも知る由なければ逐々に調子も高く談する聲

「其處か貴孃の思召一つて實は何うともなることゆゑ篤と御考なすつて御返辭をなさるが宜しい。ナニもソンナにお泣なさるには及ばんぢや御座ませんか。」

「ヲイ／＼八瀨然う卿がいふとノ何やら僕がきまりが惡いテ。僕が歸るから後で猶ほ能くノウ」

「ヘイ畏まりました直ぐ私も御後から參ります。左樣ならばこれで御免を……偖貴孃彼の通り鵜尾樣御歸りになりました。今は大切な場合泣いてばかり御在なさる處ではありますまい。尤も何うあつても否だと仰しやるなら據はありませんがソレでは御親父の難義を御救ひなさる思召はありませんなヱ何んと仰しやる御救さなる思召があるならば去刻も申した通り鵜尾樣の御緣談を御承知なさるが宜いんです。然すると貞御の御難義を何んで餘所にはし

て置かれませう。　ツレに申すも失禮だが望んでもない御出世と申すもの其上御熱心でもありますれば貴孃のことは何んなことゝても御聞入れになりませう。　アヽ併し此處で直ぐに返辭もなり惡からう。　ハヽ成程是れには私は氣が着かんでした其返辭は娘に伺はせませう。」

「イヽエ御返辭をする氣なら直ぐも申しますけれど何を申すも此事ばかりは妾の一存では取極まする事には參りませんから」

「ツレぢや御親父さんが宜しいとあれば貴孃には御不同意はありませんか」

「ハイ今時の人は自由結婚とか申して種々なことを申しますけれども妾は親父の吩咐とあれば別に否は申しませんが又親父も妾の不得心なるを無理に遣るとは申すまいと思ひますから。」

「兎も角御親父が承知とあれば宜しい。　ツレぢや復た伺ひませうがマア能く御考なさるが宜しからうと思ひます。」

それと申すも親孝行の爲なれば……

と少しく意味のわり氣なる詞を殘して坐敷を出て娘を呼んで何でとか密語き示すを客間に待てる淸吉早くも之を見るに何處やら見覺あるやうなりと暫らく案じ居たりしが稍く思ひ中りけん礑と小膝を打ながら

「アヽアレヤ下男奉公に來た仙藏ぢやないか」

と覺えず知らず口走るを八瀨仙作は聞つけて愕然として打駭き逃るが如く立去りたり

淸吉はいよ〳〵不審に得堪へず。　成程浦見先生が申せし如く孰れにしても仔細あらんと思ふにより客の去りしを幸ひにお琴に面會を言ひ入れたれど生憎頭痛の起りたるゆゑ御免われとの斷りに強てといふもならざれば不勝不承に歸り來る道すがらなる心の内に其も仙藏は何者にて又た何故に緣談の取持をすることとなるや。　一向合點行かざることなり。　又た鵜尾とかいふ人も何人なるか不審しく、　個は兎も角も浦見先生に委細と告けて共考をも問ふて見ばやと思ふにより再び浦見不二雄の宅を訪ふつもりにて歩み行く後よりして出し拔けに

「御用の筋あれば直ぐ警察へ同道せ。」

「イヤ何にも私に覺はありません」

「辨解する事があるならば彼地へ往ッてするが宜い。」

探偵係り兩人にて駭き騷ぐ淸吉を無理に引き立て立ち去りたり。

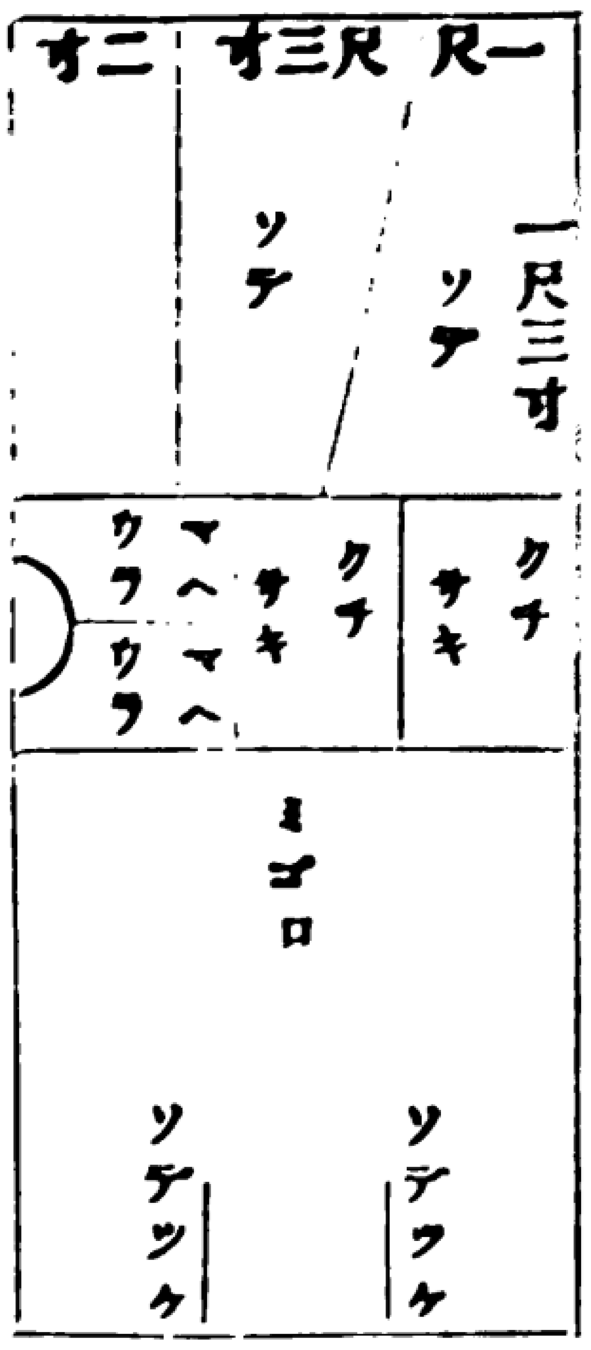
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

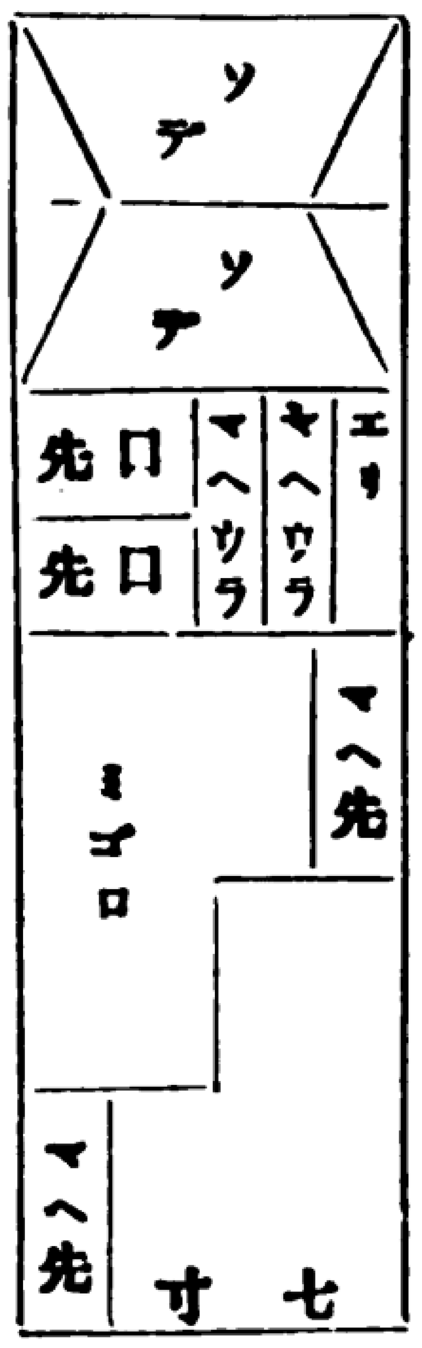
裁縫獨學び(第十)　木下貞子

シヤツ裁縫法

シヤツを縫ふには第一に袖口の處を五分程殘しましてうして袖下を縫ふのでそ、口先きの切を袖口によくあひます樣に最初競べましてたち袖口の切の餘りがありましたなら其の切れにて袖口の山にて襞を取りまして而して口先きの切れをぬひましたりくけたりするのです、夫れから背をぬひ但し二度ぬふのです、次に脇をぬひ袖を付けるのです、袖をつけぬ先きに裾をぬつてもよろし夫れから前裏の切をぬひつけたり襟をつけたり又其のつけたる襟をくけ終り左の襟の方へ穴を一つ明け但し襟もとより二寸四五分下りて一つ明け其の一つの穴をもとゝなし兩方へ二つつゝ一寸二分づゝもへだて明けるのです、然し五つと通例きまつてをります又右の方へハ其穴によく合ふやうに合せ釦鈕を付けるのです、袖口も同じく一つか二つ宛明け前の方へぼたんをつけるのです。



巾二尺五寸丈ケ一ヤード半日本の三尺六寸と以てシヤツノ裁方。　丈一尺九寸五分襟肩二寸。



袖丈一尺二寸五分袖口四寸口先キの切六寸五分アゴ二寸二分襟肩二寸二分丈二尺。

大黒頭巾の裁縫法

最初に常巾の切地四角なるを圓くしまして夫れから襞數大抵七つ程とりまして裏及ひ表へ雙方躾糸をかけ縁とつけるのです、其の縁巾ハ通例六分は多くて七分位にしてよろし而して嬰兒の頭に合せて周圍の寸方ときめるのです、さりながら進物等にしますには一々くらべる事ができませんから生れてから二三ケ月より十ケ月位迄は一尺位にてよろしいです。

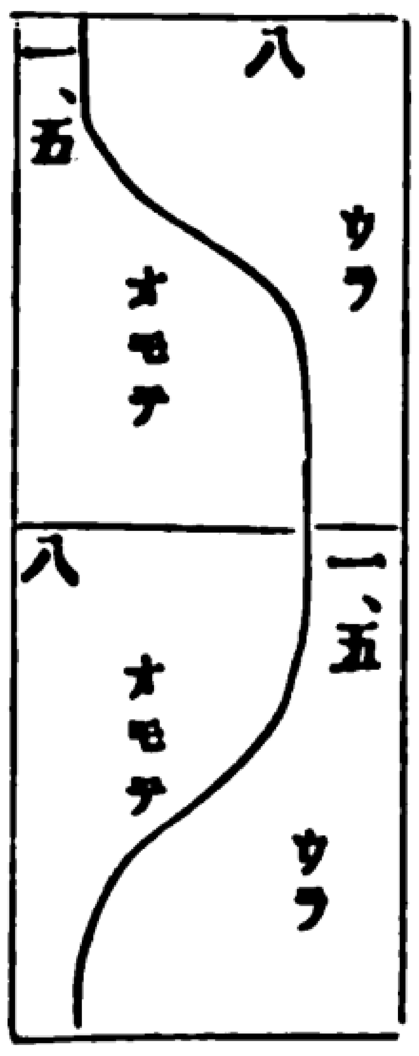
四五歳位なる童子の宗十郎頭巾を裁縫する法

童子の宗十郎頭巾を裁つには中巾四尺七寸五分になし頭の裏地は別の切にいたしまして一尺八寸程入ります而して頭の周圍ハ大抵一尺三寸にてよろしく垂は一尺四寸位の長さにしのちの垂は袴の裏の樣に巾を大抵六七分ほど切を交りて縫ふのでそ、頭の長さも九寸位にて充分大きくてきます。縫ひますには中央を先きにぬひたれをぬふのです。

船底頭巾の裁縫法

裏と表を四枚合せまして其の中間を五寸ほど一枚別にしてぬひ而して綿を入れ引きくり返してくけるのです。裁つのにもやはり布二枚を重ねてたつのです、さりながら

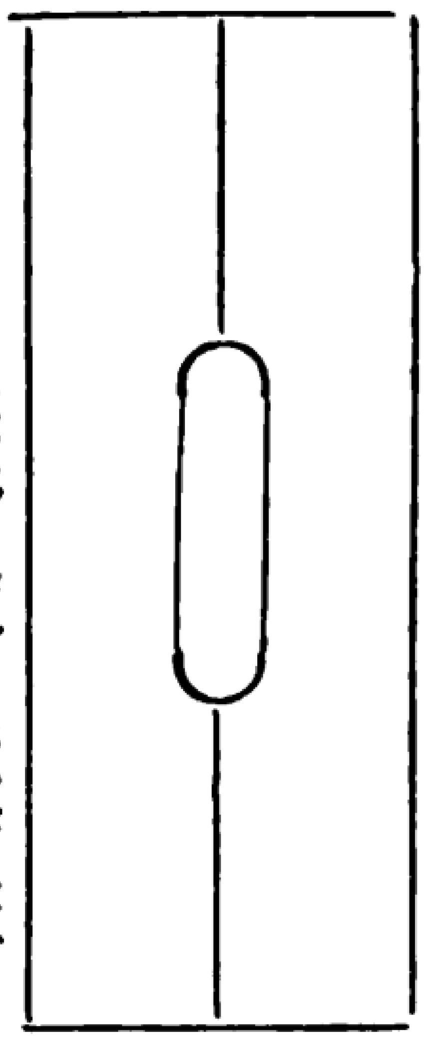
裏は中縫にいたしますのです。



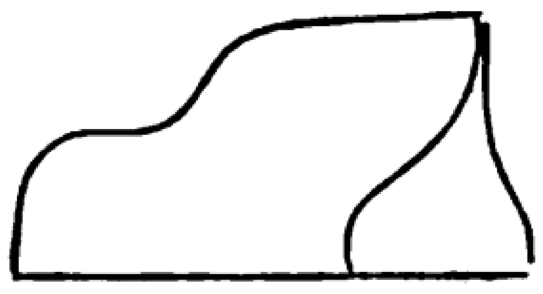
一尺九寸巾なれば長サ四尺帶巾なれば長サ八尺ほど入ります。

早道頭巾の裁縫法

巾を二つに折りまして眞中を鳥渡一尺五寸程明けまして左右をぬひ上の圖の如く切地の中央へ其縫目をなしおき兩方をぬふのです。



吉原頭巾　裁縫法



丈一尺一寸にたち巾下はいつぱい上の巾は七寸に抉り落すのです、其の襠の長さは五寸と三角形に釣裁しまして而して上の方を圓くなし前の方の丈けを六七分も八分も縫ひ込んでよろしいです。帶巾五尺もありましたら澤山です。

縫ひ取り獨學び

次號即ち四十二號から神宮みね子孃の稿にかゝる縫ひ取りの學び方を載せます。縫ひ取りは押し縮と同じく婦人がたの御たしなみに最も適當のものゆゑ、まだ御存じの無い方は折角御覽を願ひます。

文藝美術

韻語の品格略說

ひところ大學の學者たちが新体詩を言ひ出した時に得手勝手な辭句を用ゐる事を許しました。學者たちがこれを許した故は、思ふに論が走り過ぎたので、從來の和歌などの辭法が不自由に多くかたむいた、それに對して辭言を最も自由ならしめやうとした、其注意が走り過ぎて、いはゆる後の批評家として反動と名づけさせるやうに爲つたのです。大學の學者諸氏が其作に於て巧でも無いとはだれも認めます。が得手勝手な辭句を用ゐた罪を學者ひとりに負ハせるのもまた酷なことです。

と言つて元より默過も出來ません。得手勝手にのみ辭言を韻文に用ゐる事の不都合ハ池袋清風氏も去年國民の友に新体詩批評といふものを出して論ぜられました。

實に韻文に於て得手勝手な辭言を用ゐるのハ最も不都合のいたりです。如何にも詩は志。其志しを言ふ段ハそれで宜いですが、既に一種の文學、時としては美想を起させるものとして取りあつかッた事ならば、如何に志しを言ひ盡くすからと言つて左樣得手勝手にハ出來ぬことです。思想を湧か

せるやうな語言はとても詩に用ゐるべきものでハ有りません
この段に於ては古來の歌人の說に服します。
が、その標準です。　惡想を起こさせ、また美想を湧かせる語言の程度はとたづぬれば、さて其處に爭ひもはじまるのです。　之に偏頗を加へたのが左右いづれも極端の論になるので、卽ち從來の歌人はわづかに言葉を言辭の一局部にとゞめて制限を與へ、また狂句師のある一部分は反對に俚語俗言の最もはなはだしいのに目掛けました。　いづれも中庸を得て居ぬ主義。この主義の「因」も既にある事、和歌が陵遲し狂句が俚しくなりゆく「果」の有るのも道理です。
定家卿が和歌を論じて、心は新しく、言葉ハふるく讀めと言ッた、その說が多數の歌人に示した心得で出たものならば宜しいです、が、少數の、中にハ非凡の、歌人に示したものならば歌の範圍を小さく限りハじめた大害の原をなしたと言ハなければなりません。
たゞ狂句師のある部分が俚語を用ゐる度量は尙ぶべき事、うれをいやしく用ゐるのは斥けるべき事です。　今後韻文振興の第一手段卽ち語言の活用を自由にすることのためにハ從來の韻文或は韻文めいたものゝ各の長處を取り集めるべきこと。で、それがためには歌の保守主義、狂句の急進主義、いづれも取る處ハ有ります。
普通に行はせる韻文に於て其品格を損せぬ以上は何處までも種々の言辭を用ゐるを以て能として宜しいです。　保守は之と攻擊しましやう。　が、一二の少い例で「あふりか」や「せいろん」を和歌に詠じて責めふさぎを示したゞけでは甲斐の無い事です。　同じ理で和歌の方からも取る事は卽ち品格を心にとゞめる、この一事です。

れれなアど　だ　ゔぃんしの格言の中

智慧ハ經驗の娘。
神ハ勞力の價でわれ／＼にあらゆる善い物を賣る。
よく日を過ぐせば安らかに眠れるとほり、よく身を行へば幸福に死なれる。
使ハずに置けば鐵も錆び、動かさずに置けば水も凍り、用ゐずに置けば智慧も腐る。
窃に友をいましめ、あらはに之を褒めれば友に憎まれる事も無い。

○第十回懸賞文藝得點の分　前號のつゞき

題……美人雪夜に佇む

○文章

天は朦朧！　幾萬の暗球ハ霏々として亂れ飛ひます。僅に白雲の斷れ目より、我こそといはぬばかりに、現はれし一二點の星も、其光いかにも力なさゝう——その物凄さ！　それさへも今ははや無情の雲に名殘なく押し包まれました。　地は皓皚！　雨にさらされて、砂礫のみ時得顔に頭をもたげつゝありし道も、今は一樣——その波立ちも心付かぬ迄——白銀？　水晶？　夜のふけし爲、人のゆきゝもたえし？　その足跡もみえません。　遙に挺つる松が枝に宿れる雪の塊、寒風にさそハれて、はかなくも落つる聲ポタ……そのあとは唯庭に植ゑしなよ竹の、時々頭の雪を拂ふ音のみ……この深夜——天も地も銀の花もて飾られし夜ふけに、佇めるものは？美人！　雪に羞ちてか顔を上げ得ません。　が、その樣子、如何にも憂に沈めるやう。　憂——何の？　降る雪のため——積る？　否、雪よりも猶一層……積る……いはずもがな、知る人ぞ知る

右……………撫箏女史（ミノ）

豐年の貢てふ芽出度き愛らしき別號を持てる雪の一面に降りかゝり降りつみては宮も藁屋も草も木も皆一樣に白銀作り四望皚々たる有樣は是ぞ地面の白粉即化粧でしやう人に在りては美人の爲めにも醜婦の爲めにも白粉の濃粧は却て厭はしき所なれど地球の粉飾は實に見事立派なものです時ハ早や黄昏すぎて既に高くさし上ぼりし夕月影ハ老女の化粧と云ふ凄でみはあれど折々嫉ましさうに寄せ來ては其面前に立ち塞がる仇害ハあれど其淸らけさ明らけさハ亦格別なるもの宛がら磨き上げた鏡地球の粧顔を照らさんとにハあらねど地面は一体に照り添れて亦一段の美くしさを増ます夜寂かに人定まり往來も絶し雪の路に只見れハ今輝ける月降りしける雪と其艶麗さを競ふ二九斗りなる一個の手弱女或は月を仰ぎ或は雪を詠めつゝ仔細ありげに佇んで居るあゝ乙女……不審い乙女何の爲めに佇でしやう…此寒夜に…外となかに…さてハ此乙女月雪花を愛づるの風流家にて月と雪とは備ハれるも花のみ一つ欠きたれは自らをもて物言ふ花となし三つの者を打ち揃へて見んとの意匠でしやうか否如何に風流と好めばとて斯の寒氣肌を刺す雪の夜路に雪月花を賞せん爲め佇み居るとも思はれません然れは此乙女は賢者を慕ふの淑女にて彼の最明寺が國民の疾苦を問はんとて旅僧と爲り國中を行脚しある雪の夕

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

佐野のわたりに辛して一夜の宿を求めたる…其の昔時の賢き人の降りつみし雪より深き用意のほど艱難のさまを想像りて不覺に足の止まりたるにやと熟々と打ち見やれは這は案に相違の面色…古風な面色を呈はして居ます美人立雪中俯仰翠蛾眉　唯見　涙痕濕　不知心恨誰とでも評したき風情あゝこれにて分解りました…乙女の情狀も大概は分解りました這は是れ新婚…心に添はぬ婚姻を結びし日猶淺き乙女の他出して今しも我か家に歸り來しが内には入らんともせず門の戸近く佇んだのです此の寒き雪の夜に出會ふて胸裏に湧き出づる情懷の泉は先づ故郷の父母…兄妹…友人…意中の人などですが中にも湧き方の最と烈しきは…意中の人…そは言ふまでもなく其今の境遇の然らしむる所問はでもしるき愁に恨の顏色が證據立てゝ居ます世の中は月に村雲花に風思ふに分かれ思はぬに添ふ廻ぐり合ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隱くれにし夜半の月哉若し其記憶に存するならば乙女が情懷の泉に連れて浮び出るものは此等幾種の憂き言の葉彼れと思ひ此れを念へは胸中は實に燒ける斗り其物思ひの熱の强ければこそ冬の夜…雪の中に立つ身の寒さをも忘れたのですあゝ不世出の英雄ナポレオンをさへ避易せしめたる大勢力ある雪…寒さも唯一人のかよわき乙女の足を動かすことが…暫時にもせよ…出來ないですさても恐ろしきは人の一心！

右………………………………………………盬野鉉吉（イハシロ）

玲々たる水晶宮　皚々たる銀世界四面眞白です夜はのあらしは拍子木の音に鳴をひそめで息のねをこらし　柳の枝は時ならぬ花を咲かせて自慢顏に時々花片を飛ばして居ます　その下に佇で居るのは何でしやう？　頭の邊がチョッポリ紅くうして背姿が少し薄黑樣子は恰度華胥仙人の見失なつたといふ鶴のやうです　が併し決してそんな者ではありませんまがふ方なく女です　しかも美人が佇で居るのです　笑ひだしさうな蛾眉山月の眉が何ぜか愁ひを帶びで花の顏せが雪の光りに反射して見れば見る程さむ風にゾットする程美しい乙女です此の寒空　まして深更に何故かうして居るのでしやう？

「天津乙女の天降り玉へしかうれかあらぬか佐保姫のよを忍ぶなるこは路のせき人目憚る我が思ひさゝすでさへも春の燒野によびつ呼ばれつ？……」と　云ふ思入です　但しは人を誑かす狐狸の辻君が又しても月雪花に思を寄する風雅娘か　まさか…矢張り永き夜を待わびで心細さの柳の糸とにらみ合ッて居るのでしやう

右いらつめ一部進呈　　しづを（トウケイ）

○懸賞文藝新題

○第十一回題（何でもよし）
右　難破船の圖題。　一月二十日〆切

○第十二回題（何でもよし）
右　處女の愛情。　二月十日〆切

○第十三回題（唱歌淨瑠璃及び文章に限る）
右　桃花　二月二十日〆切

○第十四回題（文章）
右　春月　三月十日〆切

○第十五回題（唱歌）
右　こぞの燕　三月十日〆切

○第十六回題（和歌唱歌句及び文章）
右　春の空　三月二十日〆切

○第十七回題（何でもよし）
右　雨中に櫻を折る　三月二十日〆切

○第十八回題（何でもよし）
右　いとまごひ　四月十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを尙ぶ事○第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以内の事○第三　一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所姓名明記の事○第五　原稿は半紙に限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。賞品は一等賞清親良信二氏の內御好みの畫家の手に成つた書帖だけの大さの**肉筆着色絹**地畫一面○二等いらつめ十二部○三等三部。

舊年の死（韻文）

てにずん原作
槐月陰史繙案

其一

ひざ かくる まで つもる 雪、
かぜ つかれて ためいき つきぬ。
かねの こゑ かなしく さみし、
踏め しづかに、 いなせ 小聲に。
ふるき 年 いま 死なん とす。
　ふるき 年、 あゝ 汝 死に そ。
汝は さ まで いやく 來り き。
すこやかに われらと すまひ き。
　ふるき 年、 汝は 死なざらむ。

其二

身 うごかず、 しづかに 臥しぬ。
しのゝめも いかで 見=得べき。
ひとに いのち いくつも 持たじ。
われに 友 愛を あたへき。
新年 うを とり=さらむ。
　ふるき 年！ あゝ 汝 死に そ。
ながらひ き、 われら と ともに。

たのしみき、われらとともに。
　ふるき年、汝は行かざらひ。

其三

ふるきとし行くみち盡きぬ。
おもしろきとしほかにあらじ。
されどうの目はくらむとも、
たとひそのかほ痩するとも、
ああ！かれはわがともなりき。
　ふるきとし汝へ死なざらむ。
われは汝と泣き、わらひけり。
わがこころなかば死にたし――
　ふるきとしもし死にもせば。

其四

さまでかれさはやかなりき。
されどいま何をも言はず。
荒れ地蹴＝たつ、死に逢へんとて。
あとつぎの來るもすみやか、
されどかれ前に死ぬらむ――
　ものすべてなれもろともに。

さむき夜かがやき＝わたり、
こころよくいさみ＝はげみて、
　あたらしきとし座をしめぬ。

其五

ふるきとしその呼吸せはし。
よる寒く、なくむしかなし。
ここかしこ死のかげうごく！
かうろぎ鳴き、ともし火かすか！
子のころにいまはほと〱。
　死ぬるまへ汝は手をふりぬ。
ふるきとしわれ汝ををしむ。
われら汝になにをかすべき？
　いでかたれ！いきある内に。

其六

かほやせて肉おち＝さりぬ。
ああかなし、わがともゆく！
めはふさぎ、くちびる閉ぢぬ。
かばね退け、みちびけかれを、
ただひとりうこふたたずみ、

いりくちに　待つ　める　かれを。
あたらしき　あし　とこの　うへに、
あたらしき　かほ　門の　うとに
　あたらしき　顏、　見よや　とも。

美妙齋譯　原作は何にしてもてにずん詩老の有名な作、また讀まぬ人はこの譯を見て其美を味ふ事でしやう。　くりかへし、くりかへし、愈々いでゝいよ〳〵濃い感情、これがてにずんの長處で、その細密、優美はほとんど今までの詩人に比類は有りません。　槐月陰史のこの譯も亦めづらしい好文字です。

君よりほかは（韻文）　　美妙齋主人

きみ　より　ほかは　見ぬ　まなこ、
　はかなく　もるゝ　わが　なみだ、
　君は　なぞてや　み＝たまはぬ。
きみ　より　ほかに　見せぬ　ゑみ、
　たゞ　うれしさに　そむる　頰、
　きみは　なぞてや　見＝たまはぬ。

見もせで、つれゑや、この　なかは
　なほ　ひやゝか　と　のたまはす。
君に　ばかりと　まゐらしゝ
　こゝろの　しるし　見せまほし。
わが　この　いのちは　戀の　もの——
　こひ　とは　きみの　またの　名よ——
　こひに　くはれて　死にも　せむ、
からを　うづめし　はかゑ　さへ
　あだし＝をぐされ　生れざらむ。
　死ね、　死ね！　むくろ！　せめてなき
　あとにて　きみに　さとられむ。

ひとつびとつ（韻文）　　ぶろくたア

まさごの　いそも　もとは　粒、
　うみの　はじめも　もと　しづく、
ゆく　もの　あれば、　かへる　あり、
　もろてゑ　かけて　取り　な　せそ。

雜纂

日本陶器小史（其一）

やがて内國博覽會も始まること、其時御見物のいらつめの參考の一端にもと日本陶器の起原沿革を叙事体に書きつゞッて見ました。

日本に陶器のはじまッたのは最も古いと見ゑて、大むかし大巳貴命の頃に大陶祇がはじめて之を工夫したとの事です。この前までは一般に行はれたのは所謂「石器」、即ち石をきざんで作ッた器でした。大陶祇がつくり出してから後は陶器が重に用ゐられた事と見ゑて、終に甕器部といふ名稱さへ出來ました。後人代になり、神武天皇が大祭りを行はれる時稚根津彦といふものに命じて祭典の器を陶器で作らせられたとの事で、要するに此時代に於ては前の神代の製造よりよほど進歩したことでしやう。第十一代垂仁天皇の時代に野見宿禰が土で人形を作り、殉死に代へたこと、これもいくらか一般の陶器に進歩を與へた事で、既に土で物の形を作れる考へがついた以上は更に素焼き、無紋の陶器に飾りを施すことの工夫も從つてまた付く譯です。次に瓦の製造が始めてはじまりました。日本これまでに瓦は更に無かッた處へ、百濟から瓦師を貢したため（其時は第卅三代崇峻帝）やがて推古帝の時に至り、實地に之を燒かせ、大和の法隆寺の屋根に用ゐて試ました。この瓦がいはゆる磚瓦で、大むかし、甕といふものと燒き方も質も相同じく、後世うの專門家の間に此磚瓦の種類を布目瓦と呼びます。

第四十五代聖武天皇の時も有名の行基が出て丸形の陶器に必要な轆轤を工夫し出したため、從來手や或は不作法な型に入れて時間と費して拵らへる物が少數の勞力で出來上るやうになり、ほとんど一般の需用に應ぜられる位になる、と從ッてまた一般の需用も殖ゑ、幾年か胚胎した日本製陶術の花もやうやく萠しました。行基の時代に製造した陶器は今猶奈良の東大寺にあります。

が、この時代の陶器はすべていはゆる土燒きもので、其間苦心の人もあまた有ッたやうでしたが、終に四十代ばかりの間は何の發明も無くて過ぎました。土燒きは即ち陶器ですが、石燒き、即ち磁器と言ッてかたく燒く事の出來るやうに爲ッたのは第八十六代後堀川天皇の時でした。この時加藤四郎左衛門といふものが唐へ渡航して、千辛萬苦石燒きの法を傳へり、歸ッて後尾張の瀬戸村に住み、さかんに製造し出

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

した、これで日本陶器にはじめて花も咲きました。

尾張の瀬戸村に加藤四郎左衛門が卜居して職工を敎へ、工場を整へ、土燒きにかへて美事な石燒きを製出しましたから一般の人氣も之に引き立てられ、終に尾張の瀬戸の名は全國へ轟きました。　が、併し加藤の石燒きは其學んだ基こそ支那なれ、實は猶石燒きの一種で、純粹の磁器では無かつたのです。　世間公衆は左ほどにも思ひませんでしたが、終に其道の中には苦心する人もあり、後柏原天皇の時になつて屈指の英傑祥瑞が起りました。

祥瑞は五郎太夫と呼び、後柏原天皇の時の人でした。　加藤流の瀬戸ものがまだ完全の磁器で無いところに心づき、奮つて支那にわたつてやうやくにして燒き窯の構造を知り、歸つて肥前の伊萬里を見立てゝ其處に止まつて製陶に從事したこれがいはゆる伊萬里燒の元祖でした。　是で始めて完全の石燒きも出來、ひと燒き、青磁、染め付け、赤畫、其他各種の彩色をも施せるやうになりました。　太古からこゝまでやうやく三千年、はじめて日本製陶術も完全しました。　之をいたしたのは實に加藤と祥瑞との二人でした。　これまでが日本陶器の一般の沿革です

（以下次號）

舊幕府の監獄（其二）

美妙齋主人

その「しやべり」は左のとほりでした。——

「娑婆からうしやアがつた大まごつきめ、はッつけめ、素ッ首を下げやがれ！　御牢内は御かしら、御隅役さまだぞね。　一番目にならびやがつた一二一六一錢とり大坊主野郎め、うぬがやうな大まごつきは夜盜もしねエめエ、火も付け得めエ、かッさき松明もいけ碌々には振り得めエ。　本田あたまに銀ざせる、櫛やかうがいたばさしのちよつくらもちを爲やがッたり、大勢で申すことまだ〳〵そんな事ぢやあるめエ。　又は堂社金佛本尊は橋のかなもの引ッぱがしやがつて、通り古鐵かひへ眞鍮錢の下馬に小安く賣ばらやがつて、二文三文のよみがるたか、薩摩芋の食ひにげか、夜鷹のあげにげでもしやがッて兩國ばしをあッちへこッちへまごついて大屋のあるぬも源につけだされて失やがつたらう。　直な杉の木、まがつた松の木、いやな風にもなびかんせと御役所にて申すとほり明白に申し上げろ。」

之について左の節のをしへを言ひわたしました。——

「これ新入り、娑婆ぢやア何といふか、かと言ふか、聲

隱ともいふか、よく聞け。　婆婆ぢやア後架とも雪隱ともいふが、御牢内ぢやア名がかはり、つめの神さまといふ。つめには本番明番とて二人役が有つて日に三度夜に三度鹽みがきにするところだ。　穴の側方さくつて堅八寸、横四寸（！）前にうつたが〇〇〇〇〇、まはりに打つたが抹香ぶち、その抹香ぶちへ〇〇でも小便でもしつかけやがりや我が婆婆から着てきた一枚おんぼうで拭かせにやおらねエ。　それも〇〇でも小便でもたれたきやア權兵衞なら權兵衞、八兵衞なら八兵衞と汝が姓名なのつて借りやがれ。　それも二人役のうけこてへねエ内は道具屋の神酒徳利か、六尺棒をのんだ人足を見たやうににょつきり立ちをして居ると、御牢内格式の疊み仕置きを申しつけるぞ。」

手段をあらゝしく牢内の清潔をはかつた處はこのをしへでもわかります。　疊み仕置きとは疊みの上に坐らせず、板の間に臥起きさせる仕置きでした。

次に下帶びの申し付としました。——

「ゆふべ來た新入り、これわが物は婆婆ぢやア何と云ふ。帶びといふか、ふんどしといふか。　よく聞けよ、婆婆ぢやア帶びともふんどしとも言ふが、御牢内ぢやア名がかはり、帶びの事は長もの、ふんどしの事は細ものといふ。ぞそれをむかふどはりへ持ツて行つていけずんざいに振りまはし、同座の相囚人が首でもくゝるとわれが解死人おならにやならねエ。　うぬが糺明おふせつけられた御奉行さまから出牢證文のくるまでは肌身はなさずきツと守つて居ろ。」

牢中の紀律を是でおのゴからとゝのへたのでした。　次ぎにまた左の言ひわたしをしました。——

大不作法

前號お出したのと似た事ですが、珍らしい故載せます。|まだむ| |くらむ|といふ貴婦人が人に大不作法の大田舍ものはどのやうな人かと問はれて斯うこたへました。——「人の出入りする處にすわり、通行の邪魔を思はぬ人、目上の前で唾を吐く人、集會の中で自分ばかりといふ体で口を利く人。」

廣告

懸賞小説募集廣告

●題 春季ニ係ル者 ●頁數 一頁十二行一行廿四字詰五十頁以内

●文体 何種を限らず ●宿所 姓名は別紙に認め原稿には別號亦は符號を記する事

●期日 四月十日限堅〆切 ●賞品 壹等 金拾圓 貳等 金五圓 三等 金貳圓 以下秀逸之分五種を撰拔し以良都女一ヶ年分より三ヶ月分迄亦ハ其に相當する書籍雑誌を贈呈する事

●撰者 山田美妙齋主人

●受賞之小説 は此を以良都女に掲載するか亦は一部の書として出版する事

●原稿届所 大阪市西區南堀江上通四丁目百十四番やしき 嗜文會

美人二十名

満員の上は謝絶の事

世界第一身体白色剤料ハンドコロン完全無比なる血液清滌剤サルサ根佛國流行ポマドンヌールなどの褒効確實衛生無害なるを世に證せんため御望みの有る世の令嬢令夫人其他婦人にして治療を望まるゝ方々は右薬剤を無謝儀にて服用せしめ醫學士の診察のうへ且必要の衛生法を固く守らしめ不日にして肉色櫻紅肌理秀麗たらしめんとそ斯る實地廣告ハ泰西殊に米國などにて行はるゝものなれども我國にては甚少し今人員二十名を限りて貴需に應ずべし有志の婦人各位は速かに申し込まるべし既に是にて奏効を得なば翁屋の製料の一大奇剤たるを知るに足るべし

明治二十三年二月八日

世界第一白色剤原料ハンドコロン、佛國新流行寒中化粧薬ポマドンヌール、日にやけぬ水、梅のゆき、薔薇、れもん等化粧最上化粧石鹸

一切化粧品專賣本舗

免許薬舗 おきなや

額面書附錄の豫告

二月十五日發兌いらつめ第四十二號には

米國はくヱッと氏の「浮世の苦しみ」といふ圖

●右額面に成るやう作ッた物故通常のいらつめの挿畫より二倍以上の大きさです

はくヱッと氏の圖樣ハ三漁夫が一葉の小舟に乘つて暴浪狂風の內に魚を捕る圖で是も亦石版密畫です漁夫の苦心の顏色体格網の中に躍つて居る魚の影など洵に非凡の出來です

日本畫の秀逸は追々之を版にして廣く世に公にしますが西洋畫に至つてハもつとも少い方です夫故是から弊社に於て重に洋人の筆にかゝる有名の畫は次第に順を追つて出版し西洋畫の珍らしい處をも讀者の御覽に入れる心得で今度のはくヱッと氏の畫も其一著歩で猶時としては其間らふヱるなどの秀逸を載せます

成美社

廣告

通信女學發兌廣告

一年で女の心得になる學問を手易く敎授し家に居て用事の暇まく〱に稽古の出來る樣に仕組たるものにて文章は誰れも讀める程にやさし〱く其上尙ほ分らぬ時ハ手紙にて質問の出來る樣に致し、毎月一册發兌し左の諸科目を敎授す

家政學、作文法、和學、漢學、英學、萬國史、日本歷史、算盤、理化學、生理學、動植學、歌詠方、圖入地理、英學

敎師ハ醫學士三島通良、鈴木弘恭、木村祐吉、其他重もに明治女學校の敎員諸君に委賴し專ら親切鄭寧を主意とす○一册二百頁にて一年二千五百頁となる之にて女子一と通りの學問を悉とく敎授し年末紙上試驗と行ひ及第する者には女學雜誌社通信女學部卒業證を寄す○一年の計は春に在去一ヶ年の徒らに過しことを思へば此一年是非とも心掛けて普通女學を修業する事肝要なり夫には一月最初の分より購讀せねば中途にて心付くとも既に遲し●一册三十二錢ふて全國郵稅なし半年分前金一圓八十錢同一年分三圓五十錢、女學雜誌と合せ購讀する者には各一割づゝ減ず○毎月十日發兌○

麴町區富士見町二丁目

女學雜誌社

米國新製絨氈羅氈塵去り器械

堅牢無比、便利一等、切地を損せずに秋毫の垢埃をも去る器械○貴紳の住宅に最も必要の品○一個四圓五十錢

專賣　神田區通鍋町十番地　**高木商店**

いらつめ

合本

明治廿二年十、十一月分○紙數百二十六頁○價郵稅共十七錢五厘○廿八號ゟ卅三號迄揃ひ○明治廿二年十二月分○紙數八十四頁○價郵稅共十二錢○いづれも府内は無郵稅

右十二月分合本は一月十二日から發賣○郵券代用は五厘切手で一割ましに限る。

毎月一回廿日發行

眞理 第四號

一月廿日發兌

眞理●政治熱をして宗教世界を冷殺せしむる勿れ●ダルウヰン學說と哲學的終局論の關係●奇蹟論●福音書評論の法如何◎雜錄●小日向切支丹屋敷及岡本三右衛門墓の事密書入●蟹の母親第三●女房の不經濟◎文園●數件◎雜報●春餅●消防夫の出初式●電光一閃●珍書展覽會●新聞の無休刊●明治廿三年●然れとも●日曜學校の春●何の日か宗派心を一掃せんか●今日尙ほ●敢てアルノルド氏に質す●曼帝德行余聞●在英日本人の演說

◉一册八錢半年前金四十錢一年八十錢●金國無遞送料●見本は五厘切手十七枚

發行所　東京駿河台鈴木町　**世光社**

印刷所　東京神田區松下町三十三番地　熊田活版所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY